京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

2024年　7月　15日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋 作　様

所属部局・研究科　人間・環境学研究科

職 名・学 年　博士後期課程１年

氏　　名　中村 洸太

助成の種類	**令和6年度　・　国際研究集会発表助成**		
研究集会名	Kinema Club XXII: Borders, Boundaries, Edges, and Fringes in Japanese Film (Studies)		
発表形式	□ 招待　・　■ 口頭　・　□ ポスター　・　□ その他(		
発表題目	Silent Film Screenings Reframed: Post-Pandemic 'Live Cinema' Practices in Japan		
開催場所	イギリス、シェフィールド、シェフィールド大学		
渡航期間	2024 年　6 月　8 日　～　2024 年　7 月　15 日		
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　■ 無　□ 有(　　)**		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	費　目	金額(円)
		航空運賃	186,650
		宿泊費(7泊8日)	96,300
		滞在費(7泊8日)	40,000
		英国内移動費	20,000
		その他	7,050
		以上に助成金を充当	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) シェフィールド滞在中、想定していた以上に円安の影響がありましたが、おかげさまで非常に充実した時間を過ごすことができました。心より感謝申し上げます。 選考結果につきましては、5月末までに通知していただけますと大変ありがたいと感じました。		

成果の概要 / 中村洸太

1. Kinema Club XXII について

2024 年 6 月 12 日から 15 日にかけて、イギリスのシェフィールド大学にて「Kinema Club XXII」が開催された。報告者は「Silent Film Screenings Reframed: Post-Pandemic 'Live Cinema' Practices in Japan」を題目に 20 分の研究発表を行い、パフォーマンス付きのサイレント映画上映が、パンデミック渦中／以後に「ライヴな体験」として新たな価値を見出された過程と要因について考察した。

Kinema Club は元々各国の日本映画研究者たちが資料や情報を共有するためのネットワークとして立ち上げられた。現在、Kinema Club が運営するメーリングリスト「KineJapan」には 800 名以上が加入しており、サイレント映画期から現在に至るまでの日本の映画作品や映画上映に関する情報共有や意見交換が行われている。Kinema Club の研究集会は 1999 年よりアメリカ、日本、ドイツなどで開催されてきた。第 22 回となる今回は「Borders, Boundaries, Edges, and Fringes in Japanese Film (Studies)」がテーマとして掲げられ、既存の映画研究にとらわれない新しい視点から日本映画（研究）を考察する、若手研究者や日本映画研究の第一人者たちによる様々な研究発表が行われた。

研究集会では、2~3 名による 20 分の研究発表からなる計 8 パネルが 2 部屋で並行して行われたほか、3 名による 10 分間の発表と 1 時間の Q&A からなるライトニング・ラウンドが計 3 プログラム、映画研究者や実践者たちがそれぞれの視点から日本映画（研究）のあり方を再考する 90 分のラウンドテーブルが計 2 プログラム実施された。報告者は、初日初回のパネル「Rethinking Film Exhibition」で、フランスの日本映画祭の役割を考察したロレーヌ大学博士課程の Lucie Rydzek 氏とともに発表を行った。また報告者は、自身のパネル以外に、戦争の表象を議論する「Ghosts of War」、現代日本映画の国境と他メディアへの横断性を分析する「Pop Culture and its Affects」、「他者」の表象を考察する「The Politics of Solidarity」を聴講し、発表者たちとお互いに感想と意見を共有した。

2. 研究発表について

報告者は、「Silent Film Screenings Reframed: Post-Pandemic 'Live Cinema' Practices in Japan」を題目として、コロナ下における「ライヴ」な映画上映の隆盛と伴奏付きサイレント映画上映の連関を考察する研究発表を行った。通常の映画上映にライヴな要素を付加した上映形態は、映画のデジタル化に伴って 2010 年代に全国的に急速に広まった。観客自らパフォーマンスをしながら映画を鑑賞する「観客参加型上映」はその一例である。本発表では、コロナ下においてサイレント映画の伴奏つき上映が参加型上映の代替的な存在となった点に着目し、その要因をサイレント映画期と対比させつつ考察することで、現代の映画上映における「ライヴ性」の位相を明らかにすることを試みた。

発表では初めに、サイレント映画期の映画上映においてライヴ・パフォーマンスは不可欠な存在であったことを確認し、現在日本で活動する「弁士」（上映中に口頭でテクストを説明するパフォーマー）と「楽士」（上映中に音楽を伴奏するパフォーマー）とその特徴を概観した。その上で、関西圏で幅広い層の観客を引き寄せている楽士・鳥飼りょうの実践を事例として考察を

行った。鳥飼の上映では、観客はしばしば、声を出す、身体を動かすなどといった、観客参加型上映と類似した反応を見せる。実際、パンデミック下において鳥飼の上映は観客参加型上映と類似したものとして喧伝もされていた。なぜ鳥飼の実践は「ライヴ」な映画上映の潮流と交差し得たのか、そしてその交差は何を意味するのか。報告者による劇場および非劇場上映でのフィールド調査をもとに、映画の中に没入させながらスクリーン外へも意識を向けさせるパフォーマンス、観客の反応を促す上映の場の空間性、映画上映を取り巻くコロナ禍特有の経済という 3 つの側面から考察した。

発表後の Q&A や参加者とのディスカッションでは、パンデミック下における人々の「ライヴ性」の知覚と身体性の変化は今日のサイレント映画の受容に関わっているのか、現代のサイレント映画上映の普及と「アトラクションの映画」（トム・ガニング）と呼ばれる表象の間に関係はあるのか、鳥飼の上映作品の選定にどのような特徴があるのか、上映の告知においてソーシャルメディアはどの程度重要なものなのか、など様々な角度からの質問があった。現代日本のサイレント映画上映を、映画上映史や日本国外の実践などより幅広い文脈のなかに位置付け、その特性を具体的に解明していく必要を強く感じる、実りある研究発表となった。

3. 映画祭との並行開催について

本集会では、同時期に開催されていた「シェフィールド国際ドキュメンタリー映画祭（Sheffield DocFest）」に参加することも推奨された。毎日 14 時 30 分に集会が終了し、映画祭で各自ドキュメンタリー映画を鑑賞した後、夜に再び集合し発表や映画の感想を共有することができるようなタイムテーブルが設定されていた。また、研究集会の最終日以降も、映画祭に残った研究者たちの間で作品や研究に関する意見交換も行われた。これにより、研究集会での発表はドキュメンタリー映画祭の上映作品とも共鳴し、日本映画という枠を超えて研究を捉え、横断的に議論を深める機会となった。例えば、報告者の鑑賞した、広島と長崎の被爆者にインタヴューした『Atomic People』、抑圧下のパレスチナに生きる人々を追った『Three Promises』と『No Other Land』、ウクライナのジャーナリストたちの活動を描いた『Of Caravan and the Dogs』、カナダの先住民の人々の植民地主義への抵抗を描く『Yintah』は、戦争、抑圧、「他者」の表象可能性／不可能性を思索する研究発表と強く呼応し合う作品だった。

各国の研究者たちによる多彩で斬新な研究発表と議論、そして並行して開催されていたドキュメンタリー映画祭を通して、掲げられたテーマの通り、日本映画の「境界」を探ることができた。多角的かつ批判的に日本の映画文化を捉える視点を得た、非常に充実した研究集会だった。

Kinema Club 公式サイト：https://kinemaclub.org/
Kinema Club XXII 公式サイト：https://kinemaclub2024.wordpress.com/